研究論文

本学の遠隔授業で見えてきた対面授業の課題

鷲尾　敦
高田短期大学キャリア育成学科

１．はじめに

コロナ禍、遠隔授業には全く縁のなかった本学においても、他大学同様遠隔授業が 2020 年 4 月末より始まった。近くの 4 年制大学が 3 月早々には遠隔授業の方針を決め準備を始めているのとは違い、本学の遠隔授業の始動は遅かった。本学は、授業開始時期を少しずつ遅らせていくような対応であったが、4 月に入り LMS 委員会とネットワーク委員会を合同で招集し遠隔授業を進めるための検討を行った。新型コロナ対策委員会で遠隔授業の開始を決定し、4 月 16 日には、非常勤講師も含めた遠隔授業教員研修会を実施した。教員の準備や登校していない学生への連絡等があるため、散発的に学生を登校させ、遠隔授業の準備をした。4 月末から連休にかけて一部遠隔が始まり、連休明けから一部郵送の遠隔もあるものの一斉にスタートした。他の短大と比べ、決定してから比較的早く遠隔授業を開始できたのは、従来から学生全員にノート PC を配布しており、また manaba という LMS を導入していたからである。学生の自宅のネット環境と遠隔授業で活用できる教材や授業コンテンツが準備できれば、すぐに遠隔授業が始められる状況にあったのである。学生たちの居住場所でのネット環境が課題となるケースもあったが、ポケット Wi-Fi を貸し出す対応がなされた。

幸い 6 月 1 日から対面授業が原則となったが、子ども学科 2 年については、学外実習があることから残りも基本的に遠隔授業となった。授業スタートが遅れたことによる授業内容ができなかった部分や遠隔ではできない授業などについては、夏休み期間中に集中講義で補填した。

4 月 23 日の「新型コロナウィルス感染症対策に関する大学等の対応状況[1]」によれば、全国の 9 割近くの大学等において授業開始時期を延期、6 月 1 日時点で 6 割が遠隔授業、3 割が対面と遠隔授業の併用、1 割弱が対面授業のみで遠隔授業が多い状況であった[2]。7 月 1 日の調査では、遠隔のみが大幅に減り 2 割強、対面と遠隔が 6 割と遠隔授業の割合が減ってきた[3]。しかし感染状況が一向に収まらないことから、10 月の後期授業の実施方針についての調査では、同様の傾向のままであった[4]。

遠隔授業が全国的に急に進んだことから多くの大学で緊急の調査が行われた。名古屋大学における遠隔授業実施に関する中間アンケート[5]（調査期間：5/25〜6/7　学生：3302/4471 = 73.9%、教員：412/664 = 62.1%）では、①遠隔授業のメリットを感じたことがあるかは、学生、教員ともに８割が肯定回答で、2019 年度以前の入学生（2 年生以上）がより好意的結果であった。肯定理由は、学習時間に縛られない、動画利用の効果、通学しなくてよいである。一方、否定理由は、課題提出が多い、目が疲れる、実験できない、相談しにくい、コミュニケーションとりづらい、やる気でない、授業が理解できないなどであった。グッドプラクティスとして、動画を利用した講義、説明・質問への回答が丁寧、音声付きスライ

ド、内容が面白い、理解できる、コミュニケーションの機会が多い、グループワークなどである。一方、バッドプラクティスは、資料の配布のみ、映像・音声なし、メール返信・フィードバック無し、評価方法が分からない、質問の機会なし、長いZOOM授業であった。

九州大学のオンライン授業学生アンケート[6]（調査期間：6/1～6/9　学生：4933人 = 27%の回答、有効回答　4835人）では、学習に関するコミュニケーションの満足度は、学生間のコミュニケーションの方が、教員とのコミュニケーションより満足度が低いという結果であった。また、コロナ終息後、一部授業をオンライン化して欲しいかという点では、1年の方がオンライン化して欲しくないという回答であった。オンライン授業が対面に代替できたかという点では、2年以上は半分以上が代替できたと答えているが、1年は代替できたというのは20%のみで多くができていないと答えている。

大学教育学会の調査[7]（2020年9月30日～10月19日、学会会員1286名に対するオンライン調査で有効回答：312件）によれば、学生の遠隔授業への取り組み状況には高い評価がなされているが、学習成果の評価方法等に課題があるという結果となった。学生にとって場所や時間にとらわれず学習できるが利点であるが、レポートや課題が多すぎて全てをこなす時間がないことが課題であった。また、生活面では、友人ができない、1年は大学に入学した実感がもてない、クラブ、サークルや学外実習等へ行けないことなどが大きな課題としてあがっている。

では、短い期間ではあったが、本学の遠隔授業はどういう状況であったのか、上手くいったのかそうでないのか、どのような課題があり、対面授業の代替となったのか、学内の教員及び学生調査から明らかにするとともに、その結果からLMSを活用した対面授業の改善について考察したい。

２．遠隔授業の準備

（1）検討会

4月9日、遠隔授業の検討をテーマにLMS委員会とネットワーク委員会合同委員会を開催した。今まで遠隔授業を正規の授業として実施したことはないので、まずは、①「遠隔授業が成立するための条件」を確認し、②「遠隔授業を単位認定授業として本学が認める手続き」について意見交換をした。また、③「遠隔授業を進めるための注意点」として、Zoom爆弾の存在や登校していない学生への連絡手段、配信する資料の著作権問題、シラバスの変更、対面授業と同等の効果を意識しての遠隔授業づくり、学生のネットワーク環境がない場合の代替手段としての教室開放などについて話し合われた。さらに、④「本学の授業で利用可能なシステムの活用」について、オンデマンド時の受講確認手段や、双方向通信時の本学の回線状況などについて検討した。ここで、Meet（G suite for Education）の利用についても言及があり、その後の導入につなげた。遠隔授業をするための資料を情報教員で作成し教員向け研修を実施する提案を新型コロナ委員会にすることも話しあった。⑤「その他」として、あらためて対面と同じ効果を与える遠隔授業の方法、質疑応答やディスカッションの確保の方法、学習管理のための出席確認方法、学科コースでの遠隔授業科目（この時は一部行うというスタンスであった）、遠隔授業実施にあたっての学生ガイダンス、などについて協議した。

（2）主な利用環境

本学では、ICT を活用したアクティブラーニングを意識した授業の展開と、学生が主体的な学習を進めていくことをねらいとして、学習管理システム（LMS：Learning Management System)の manaba を 2019 年度 4 月から導入している。利用する科目数は少ないが、専任教員を中心に利用が増えてきていたところである。今回はこのシステムを、学生への連絡、学生とのコミュニケーション、資料の配付などの機能がオンデマンド授業で利用できることが大いに期待された。さらには、ZOOM や Meet などの同時双方向や Youtube を使ったライブ配信などを行うにあたっても関連する資料やアドレスを配置したり、学生に連絡をしたりする場として活用が期待された。

一方で、同時双方向通信をする機能として Meet の利用を視野に、教育機関が無償で利用できる G suite for Education の契約を進めた。4 月終わりには手続きがが完了し、学生及び教職員のアカウントを登録し利用が可能となった。利用方法の資料を作成し、専任には学内メーリングリストで、非常勤講師にはメールで配信した。

（3）教員研修について

教員研修での内容は、まず遠隔授業とは何か、授業として成立する条件は何かなど遠隔授業そのものについての説明から始めた。これには、法令上の課題、成立要件、緊急措置、著作権など、遠隔授業の要件と形式について説明した。遠隔授業の形式として、同時双方向とオンデマンドがあり授業の特性によってどちらかを検討できることを伝えた。

次に、実施にあたっての注意点として、学生への事前説明、実施計画提出、シラバス変更、システムの負荷軽減の方法、manaba を活用する方法として、授業でできること、利用例、動画配信の方法など、そして、パワーポイントによる動画資料など様々なコンテンツの作成方法について資料を紹介した。最後に、遠隔授業の計画例、特に出席替わりのレスポンス課題について説明をした。

３．本学の遠隔授業に対する調査

３．１　manaba 使用状況

本学の遠隔授業がどういう状況であったかを示すために、遠隔授業の中心的なシステムとなった manaba の 2018 年度から 3 年間の利用状況を図 1～3 に示す。ログイン数、ページビュー数、データ容量（アップロード）は、2020 年度は過去 2 年と比べ圧倒的に多くなっている。2020 年度の後期は基本的に対面授業であり前期に比べれば少ないが、それでも例年に比べると利用状況は多くなっている。

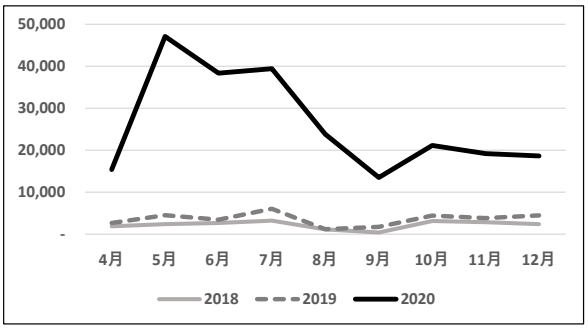

図１　ログイン総数の推移

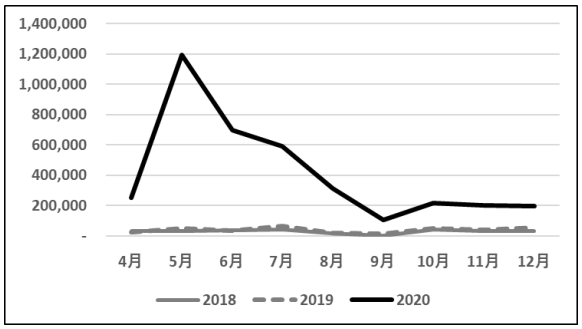

図２　ページビュー数の推移

manaba の機能として、小テスト、アンケート、レポート、プロジェクト、成績、掲示板、コンテンツ、コースニュースがあるが、2019 年度と 2020 年度の前期の利用度を比較した（表１）。投稿数や提出数などの指標もあるが、ページビュー数で比較したのが表１である。小テスト、掲示板、アンケートなどが前年に比べ多く利用されているのがわかる。

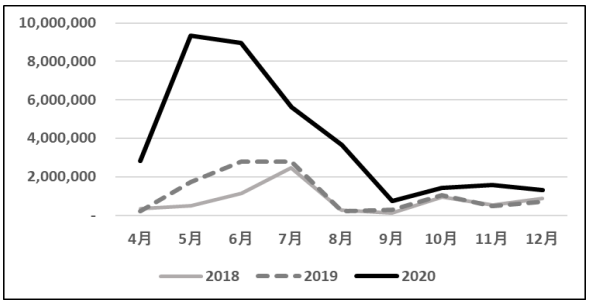

図３　アップロードデータ容量の推移

表１　manaba 各機能のページビュー数の比較

	2020年前期	2019年前期	倍率
PV数	3, 144, 300	201, 652	15. 6
小テストPV数	313, 898	3, 643	86. 2
アンケートPV数	644, 487	21, 995	29. 3
レポートPV数	666, 955	100, 211	6. 7
プロジェクトPV数	53, 442	9, 403	5. 7
成績PV数	35, 049	1, 219	28. 8
掲示板PV数	184, 952	4, 199	44. 0
コンテンツPV数	363, 728	17, 569	20. 7

３．２　アンケート調査の方法

2020 年 9 月に、Google フォームを使い、教員、学生に対し遠隔授業の状況についてアンケート調査を行った。調査項目は、自己点検評価委員会の FD 作業部会と IR 作業部会との合同で検討した。2020 年 9 月 15 日～10 月初めにかけて実施した。教員には学内メーリングリスト、非常勤へは教務課からメール連絡をした。学生には成績交付日にアンケートの実施案内をした。教員の回答者は、専任教員 20 名、非常勤教員 28 名。学生の回答数は、413 名である。

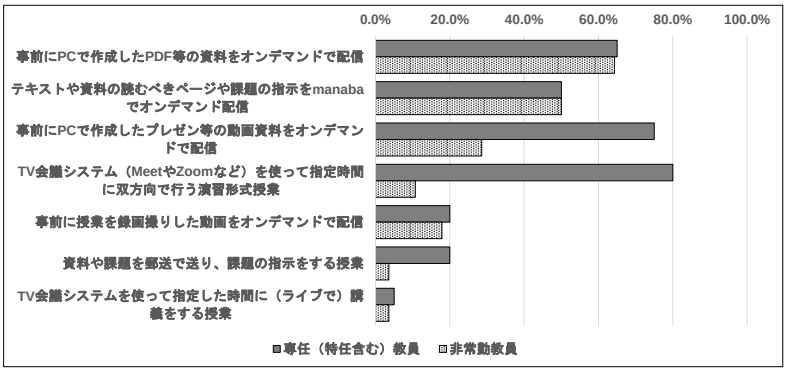

図４　遠隔授業方法の実施割合

４．教員調査結果

４．１　授業の状況

（1）実施された授業形態

図４に各教員が行った授業形態を示す。これによれば、PDF 資料や動画資料、学生への指示を掲載して自由な時間に閲覧させるオンデマンド型の遠隔授業を多くの教員が実施したことがわかる。また、専任教員の多くは、ゼミがあるためであろうTV会議システムを多く利用している。

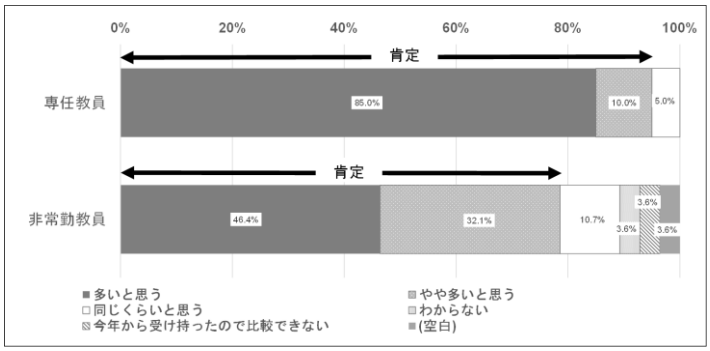

図５　授業の準備時間が多くなったか

（2）授業準備時間

準備時間が増えたと答えた割合（図 5）は、専任で 9 割、非常勤で 8 割程度あった。多くの教員が以

前は口頭や板書で済んでいたことを、資料として文書や動画などいつもとは違う形式で授業資料を準備したことなどにより、より多くの時間をかけることになった。

（3）学生とのコミュニケーション

対面授業に比べ学生との応対時間は専任の6割、非常勤の2.5割が多いと答え、専任の2.5割、非常勤の5割は否定的意見であった（図 6）。学生との応対が対面してではなく、メール、掲示板等を通じて対応する必要がありその分時間がかかると思われる。専任の場合は登校していない学生との連絡は学生支援という観点からも必要であるが、非常勤の場合は対面での授業がない分減った教員が多いものと思われる。

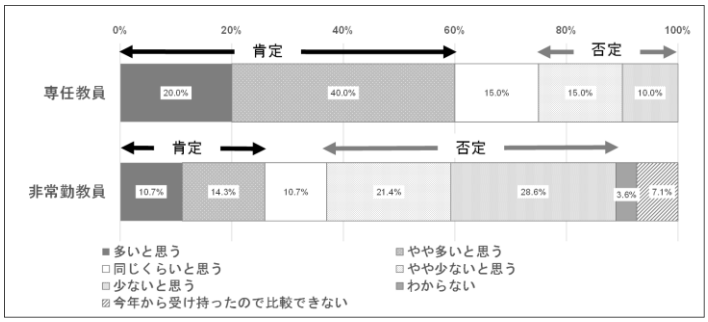

図6　学生との応対時間が増えたか

学生とのコミュニケーション(図 7)は、満足のいくものであったかという問いに対しては、全体で肯定 27.1%、否定が 54.2%でうまくいっていないという教員が多くあり、これは常勤、非常勤ともほぼ同様の傾向であった。応対時間が増えた専任教員でも、対面に比べうまくいっていない状況が見られる。

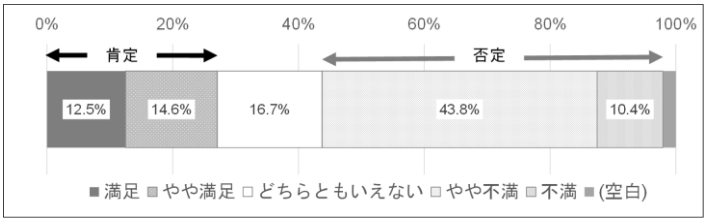

図7　学生とのコミュニケーションは満足だったか

４．２　成果

（1）対面授業に代替できたか

ここに結果を示していないが、自分が取り組んだ遠隔授業について満足していると肯定回答は 4 割強であり、否定的回答は 2 割で 3 割強がどちらともいえないという結果であった。

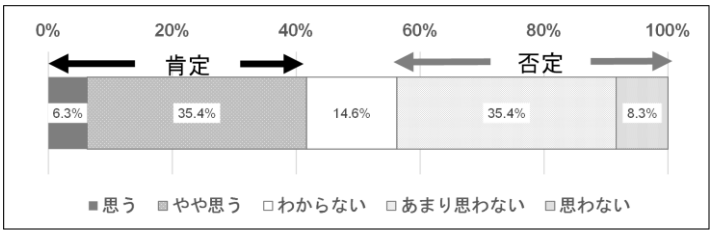

図8　授業は対面授業に代替できるものだったか

教員が自身の遠隔授業を対面の授業に代替できるものであったかについては（図 8)、回答は拮抗しており、4 割が代替できる、4 割が代替できないと答えている。傾向は専任教員、非常勤教員同程度であった。

表2　対面授業に代替できる理由

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

・1人1人の学生が授業に集中して復習のための小テストもしっかり取り組んだ
・勉強の取組みの低い学生に影響されず、例年よりも学生の成績が良かった。
・目標となるレベルまで学生がついてきた
・対面以上に授業への積極的な参加が見られた
・対面でも遠隔でもよくわかったという意見が多かった
・到達しない学生（途中でやめる学生）は、どちらの形態でも同程度いる。
・授業の形態によっては代替可能性を積極的に検討するべき

対面に代替できる理由（表 2）に、学生の学習成果が対面と変わらないかそれ以上であったという意見や積極的な参加があったという意見である。一人で受けるために、授業に集中したり、他の悪い影響を受けなかったという理由であった。今

後通常の授業においても遠隔授業を取り入れても良いという意見もあった。

一方、否定的な理由（表 3）は、「ともに学べる授業環境でない」「学生の様子がわからない」「双方向の授業でない」「学習意欲の低い学生への対応が困難」に大別できる。授業環境には、他の学生も存在する。教室は学び合いの場である。他の学生の学びの状況が、自分の学ぶ姿勢や行動に影響を与える。それが遠隔では難しい。肯定的意見では、他の学生の悪影響がないという視点があったが、ここではその反対に好影響がないという視点である。また、教員は学生を見て授業を展開する。それこそ授業はライブであり、双方向で成立する。それがオンデマンドや双方向とはいうがTV会議システムでも難しいのである。そのため、学生の学習意欲を高めていくことがなかなか難しく、さらには理解できない学生、意欲が低い学生への対応が難しい。

表３　対面授業に代替できない理由

ともに学ぶ授業環境でない
- お互いに表情が見えず緊張感がなかった
- 周りの学生はどのように取り組んでいるかを参考にすることができない

学生の様子がわからない
- テレビ会議システムは、教員と学生、または学生同士で、対面での関係性ができていないと効果が見込めない
- 顔の見えない遠隔授業では学生の様子がつかみきれなかった
- 演習に関しては学生の反応や行動を見ながらでないと、十分な指導はできない

双方向の授業でない
- 授業内容の臨機応変の流動性がなく、一方向的なものになりやすい
- グループワークなど作り込む余裕が無く、一方的に話すことが多くなった

学習意欲の低い学生への対応が困難
- 授業資料をしっかり読まずに回答していると感じられるものがあった
- 学生の受講状況が期限当日に集中。効果的な受講とは思えなかった
- 学習内容が全く理解できていなかった学生が多かった
- 意欲のない学生のモチベーションを高めることは難しい

（２）教員が感じた大変さ

教員が遠隔授業で感じた大変さを表４に示す。一つは、学生への連絡や学習意欲を上げることの困難さである。学生の反応がなく連絡がつかないケースがあり、いくら資料を準備しても視聴してもらえない学生には対応しようがないのである。次に、授業の準備の大変さである。対面ではその場で臨機応変に学生の様子を見ながら指導できるが、オンデマンドの場合は、前もって様々な状況を考えて文章や図や動画にしなければならない。今まで以上に授業の準備が必要となる。一度資料ができれば次年度以降活用することも考えられるが、今回はそこまでのことは考えられない。

表４　教員が感じた遠隔授業の大変だったこと

学生への連絡、フィードバックが難しい
- マメに学生に連絡をいれなければいけないこと
- レポートに対してほぼリアルタイムで採点, コメントを送るためにほぼ一日中自宅のパソコンに張り付いていた。
- 閲覧期限、提出期限の配信ごとのずれに学生が細かく対応できない

学生の学習意欲をあげることの困難さ
- ほんとにスケジュールがタイトだった。「未視聴」のままの人がたくさんおり、自分の意欲、学生の意欲を持続させるのが大変だった
- 授業動画を見ず、小テスト提出のみで済ませようとする学生への対応

授業準備の大変さ
- 全てテキストは自作。レポート課題や小テストの考案にも時間を要した
- １コマの授業を作るのに膨大な時間がかかり非常に大変だった
- 対面授業では細かなニュアンスをノンバーバルコミュニケーションを使ってしていたが、それを文字にすることに苦労
- 面接授業なら言い間違えたと思ったらすぐ修正できるが取り直しになる
- 一日中パソコンの前に座っている状態には正直悲鳴をあげたくなった

新入生のPC能力レベルと授業課題
- この授業で基礎を学んでいる裏で、他の先生からWord等を使った課題が同時進行していることが一番の気がかりだった
- 日本語やPCの使い方（添付やwordの使い方など）を理解していない１年生留学生への指導が非効率的

TV会議システムを使った授業運営の難しさ
- 顔も名前も性格もほとんど知らないもの同士がmeetで繋がっても、会話を成り立たせることが難しかった。
- （Zoom、manaba）学生が絶対に困らないようにするための作業、学生のフォローアップに慣れるまで時間が必要であった

そして、同時双方向の TV 会議を進めるために、教員も学生も慣れておらず、あらゆるケースを想定しながら教員は準備をするが、TV 会議システムの中でファシリテートしていくことは初めての経験で困難を感じたものと考える。新入生、特に留学生のオンラインでの対応は難しいものがあった。PC スキルの問題、留学生はさらに日本語能力の問題が大きくあった。

５．学生調査結果

５．１　自宅・下宿での遠隔授業環境

ほとんどの学生は、学校で一括購入し設定しているノートパソコンを使い、あわせてスマートフォンを利用している学生は 6 割強であった。自宅のプリンタを使う学生は 4 割強で、1 割程度印刷の必要がないという学生もあった。自宅の通信状況は、常に快適な通信ができる学生は 6 割であった。ライブ授業で問題があったのは 2 割程度で 8 割の学生は双方向通信にもオンデマンドも通信状況に大きな問題はなかった。オンデマンド形式の授業については、ほとんどの学生は問題なかった。常につながりにくい状況にあった学生は若干名あったが、後日ポケット Wi-Fi の貸出が可能となった。

５．２　受講状況

（1）受講形態

オンデマンド形式の授業を多くの学生が受講しており、ライブの演習授業の体験は 5 割程度であった。郵送での遠隔授業も 45%程度の学生が体験している。ライブの講義は、1 割程度の学生が視聴している。

（2）学習時間

図 9 は、学科・コース、学年別の 1 週間あたりの学習時間をまとめたものである。これによれば、オフィスワークコース 2 年、介護コースの日本人学生に学習時間が短い学生が多く、次に子ども学科の 1 年と続く。介護福祉コースの 1 年留学生には学習時間が 50 時間以上の学生の割合が高い。半分強の学生が 20 時間以内であり、20 時間弱が平均の学習時間と思われる。半期 20 単位とすると本来は、1 単位 3 時間 1 週間 60 時間必要とされる。授業コマ数を 15 とすると、1.5 時間×15 コマ=22.5 時間となるため、55%の学生は授業時間分の学習をしていないという計算になる。

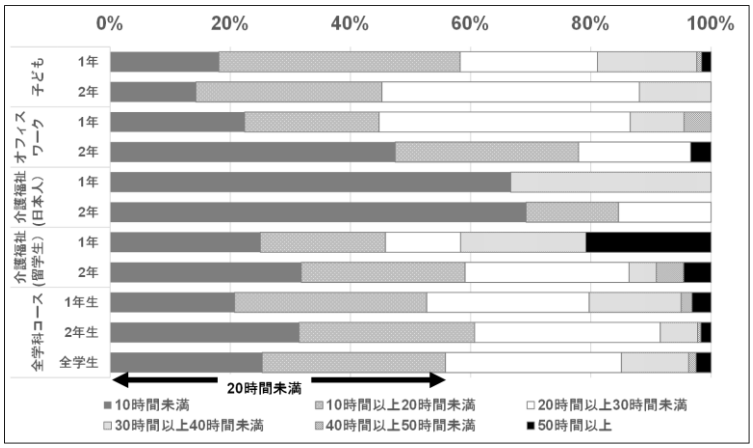

図 9　遠隔授業期間の 1 週間あたりの学習時間

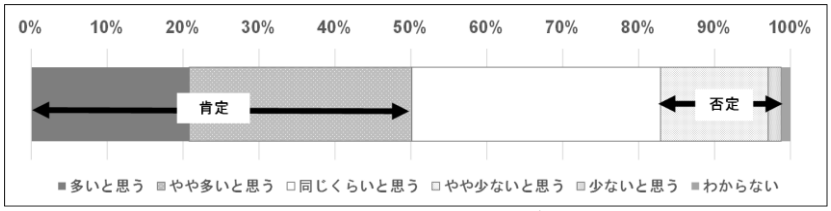

図 10　学習時間が対面の時より多いと思うか

一方で、学習時間が対面授業より多いと感じている学生が全体の5割で、少ないという学生が2割程度（図10）と対面時より学習していると感じている学生の方が多い。学校での受動的な学習より、自分からPCに向かって行う主体的に学習をしていることで、学習時間が増えているという感覚になるのであろう。

（3）コミュニケーション

教員とのコミュニケーションが満足だったか（図11）については、全体で4割程度が肯定的で、2割が否定的であった。1年と2年を比べると留学生以外は、1年の方が肯定が多い。子ども学科及びオフィスワークコースの1年の5割が肯定的であるのに対し、子ども学科の2年は3割弱、オフィスワーク2年が4割弱と2年が低かった。もともと教員とは1年間の短大生活でコミュニケーションが充実していた2年とは違い、全く対面授業をせずに遠隔授業に入った1年は教員とのコミュニケーションはこういうものだと感じているのであろうか。特に子ども学科の2年が低いのは、遠隔授業が前期最後の週あたりまで続いたことが理由かもしれない。学生同士のコミュニケーションは、ここでは掲載していないが、教員とのコミュニケーションより若干低く、全体で4割が肯定、2割が否定で、学科学年、留学生の傾向は同じであった。遠隔授業を満足であったと肯定する割合（図12）は、子ども学科2年の4割が肯定、留学生の1年の4.5割が肯定

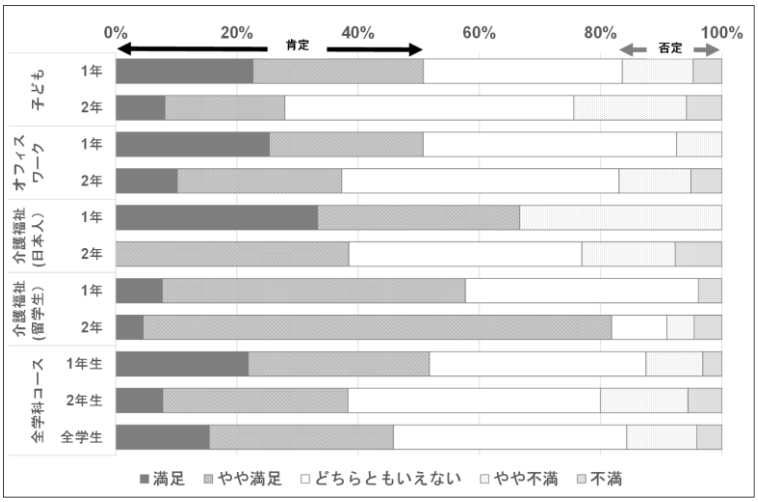

図11　教員とのコミュニケーションが満足だったか

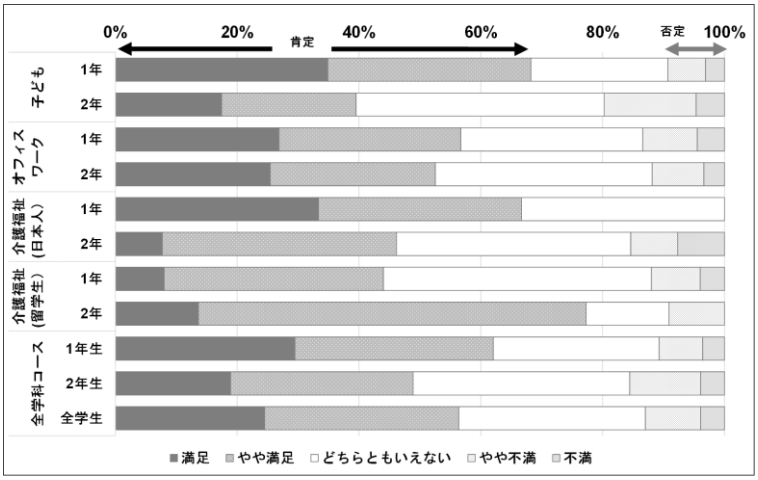

図12　遠隔授業の受講は満足か

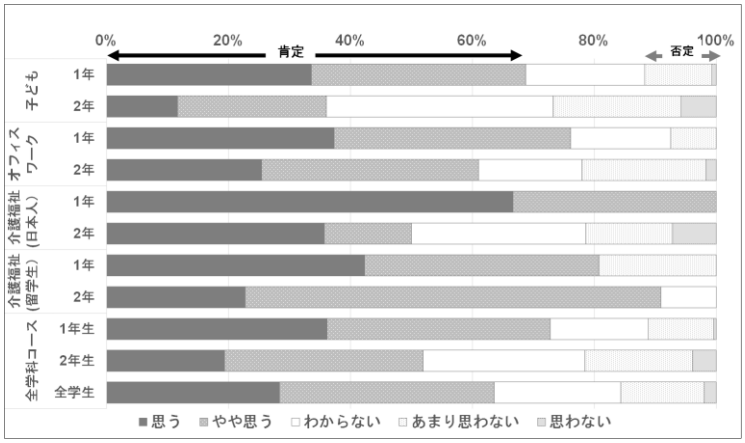

図13　遠隔授業は対面授業に代わるか

であるのに対し、子ども学科 1 年の 7 割、オフィスワークコースの 1 年 5.5 割、オフィスワークコースの 2 年の 5 割強で、子ども学科 2 年と留学生 1 年の満足度が低い結果となった。子ども学科 2 年は否定回答も 2 割と他に比べ高い。コミュニケーションと比べて満足度が高い傾向にあるが、学科コースの違いについての傾向は同じであった。

５．３　学習成果

（1）対面授業に代替可能か

図 13 によれば、全体の 6 割強が肯定的である。1 年の方が肯定的回答の割合が 20 ポイント程度も高く、2 年の否定が多い。特に、子ども学科の 2 年の肯定回答は、否定 2.7 割と肯定 3.5 割と拮抗するぐらいで、子ども学科 1 年 7 割の半分しかない。オフィスワークコースも 1 年の方が肯定的であり、全体として 6 割強が肯定回答であった。前述した名古屋大学や九州大学の調査結果では 2 年以上学生の方が肯定派が多いこととは正反対であった。

否定の理由（表 5）は、提供する授業の質や教員のレスポンスの悪さといった名古屋大学の調査のバッドプラクティスにあるような同等の理由が挙がっている。特に授業の質に対してのコメントが多くあった。また、学生同士で学ぶ楽しさと比較して一人でいることの不安、そもそも遠隔の限界を挙げている。

表 5　対面授業に代えられないと思う主な理由

費用対効果
- 普段の授業と同じ額の授業料を支払っている意味がわからない
- 授業料に見合わない

提供する授業の質
- 90 分もかからない内容のものが多かった
- ただ書かれた文章を読んだりするだけ、説明を直接受けない
- 授業を受けるよりも、課題をするだけのものが多かった
- 動画や資料では、講義を受けたという実感がない
  ひたすらに自分で考えて課題をしなければならなかった、本当に学びがあったのか分からない。
- 時間がかかるものとかからないものの差が大きい

授業における教員のレスポンス・対応
- 課題に対して返信をくれる授業と、そうでない授業があった
- 自分で考えたものが間違っていないか確かめることができなかった

学生が感じたこと、感じていること
- 対面じゃないと将来大丈夫かと不安
- 対面授業のほうが分かりやすく、友達とも話しながら勉強する事ができる
- 対面授業の方が楽しい。頭がフレッシュになる
- 先生との対面がないため、完全に対面授業の代わりとなったとはいえない
- 実際に先生と会えない分、少し物足りない

環境
- 講堂で机がない状態で授業をしていて遠隔授業と対面授業の組み合わせは正直にいって不満しかない
- 画面が止まったりする

遠隔の限界
- 分からないところをその時に聞けない
- 時間の長さも理解度も違う
- 実践して学ぶことができなかった
- 授業を受けるという姿勢が整わなかった
- 話し合いに欠ける。
- 難しい授業は一方的な授業は良くないと思った

一方、肯定派の理由（表 6）としては、提供される資料や学ぶ内容、提出課題に差はなく、一人で学ぶという点で差はないということのようである。教員とのコミュニケーションもできたとあるが、他の学生とのコミュニケーションに関する記載はなかった。両者の理由を比べてみると教員のレスポンスが悪ければ否定的であるが、そうでなければ肯定的である。提供する授業の質、資料の質が悪いと否定的であるが、そうでない授業については、むしろ繰り返し学べる、自分のペースで学べるという肯定的な評価となっている。一点違うのは、学生同士の学びについてである。遠隔が良いという理由に、他の受講生とのコミュニケーションに関する言及がない。否定派では、他の学生との学び、他の学生がいることでの学習の楽しさが遠隔では感じられないと言及している。TV 会議システムを活用した授業の進め方に慣れない教員であったが、その点うまくファシリテートし、学生同士のグループワークをうまく回していけるようになれば、この点について

回答に変化はあるかもしれない。

（2）良い授業と感じたこと

良い授業と学生が感じたことは、5 つに大別できた（表 7）。わかりやすい動画資料、わかりやすい PDF（文字化された）資料、学生の意見を聞く機会や質問に積極的に答える、具体例や見本を見せたり振り返りの小テストをするなどの授業の進め方、対面と変わらない授業づくりである。ここには掲載していないが教員の取り組みで良かったことについても調査したが、動画資料での話し方がゆっくりであったり、対面より細かな説明があったり、資料の作り方がわかりやすかったり、綿密な連絡や呼びかけやレポートへのコメントがあるなどが挙げられていた。

（3）遠隔の良いところを対面でも行ってほしいこと

遠隔授業での良い取り組みで、対面授業においてもそのまま取り入れてもらいたいことについて表 8 にまとめた。授業の動画を撮影して授業動画を LMS を通していつでも見られるようにすること、課題や授業資料を LMS にアップすることがあった。また、他のネット上の参考資料へのリンクをあげることもあった。これらは学生の自主的な学習つまり主体的な学習につながる。授業時間外での学生の主体的な学びにつながるものであろう。

表 6　対面授業に代わると思う主な理由

差を感じない
- 対面のほぼ遜色なかった
- 対面と遠隔で授業内容が同じ、対面授業との差が感じられなかった
- 特に困ることが無かった
- 内容が足りないと思ったことがない

学んだ感・繰り返し学べる
- 動画配信であれば、わからないところは何回も見直すことができる
- 何回も資料を見直して動画も見れるので理解できなかったことを復習するきっかけにもなった
- レポートが多かったのでその時に授業の復習になった

学習のしやすさ
- とても丁寧に詳しく説明してくれたので、理解できた。
- 遠隔授業の方が集中できたから
- わからないところも質問しやすくてとても良かった
- 1 人で落ち着いて授業を受けれる。
- 資料などきちんと配布してくれ分かりやすかった。

自分のペースで学習できる
- 対面授業より効率的に勉強できたと思った
- 好きな時間に受講できたから
- 自分のタイミングで勉強できる為やる気を損なわない。計画が立ちやすい
- 沢山の課題を期限内に自分のペースで取り組む力が身についた
- 本人の真剣さが提出や出席なので明らかになる

わかりやすさ
- 先生とのコミュニケーションもちゃんと取れていた
- 先生の講義が遠隔でもわかりやすかった
- 丁寧に説明をして頂いたので分かりやすかった

表 7　良い授業と感じたこと

わかりやすい動画資料
- 実際に操作している画面を大きく録画してくれていることと、掲示板などにさらに追加の説明も載せていただけていたためとても分かり易かった
- PowerPoint に音声をつけて（先生の説明）くださった
- 動画が短く簡潔で見やすく、わかりやすかった。

わかりやすい PDF 資料
- 動画で説明してもらうよりも文章で説明してもらった方が自分のペースで進めることができた
- 動画はどんどん流れていってしまうので文字化されている方がよかった

学生の意見や質問に答える
- 最後にわからなかったとこの質問を次の授業のときに説明してくれていた
- 毎回の授業アンケートで、課題の量は多いか聞かれていたので素直に答えることができた
- 学生の意見を授業に積極的に取り入れていたから。
- 課題を出したらそれに返信をくれてとてもやる気が出た。

授業の進め方
- 教科書に沿って細かく具体例を出して学べたため分かりやすかった
- 授業後すぐに穴埋めの小テストをしていたところ
- よかった人の見本を見ることができたから

対面と変わりない授業づくり
- 対面授業と変わりなく遠隔授業をしてくれた
- 話し方がゆっくりで普段の授業と変わらなかったところが良かった。
- スクリーンをつかっての説明だったので、普通に授業を受けているようでわかりやすかった

通常の授業では、教員はしてこなかったのか、配布した資料に従って授業を進めてほしいと言っている。耳だけでなく目でも資料を追いながら順に学習していくことのわかりやすさを学生は求めている。また、授業のわかりやすさという意味で、授業開始時には授業の流れや学習範囲を示すことを求めている。本来、授業では当然すべきことであるが、行われてこなかったのであろう。遠隔では、教材だけでなく学生への指示を教員は意識して掲載した。このことによって、学生に授業の進め方や範囲を授業の内容に入る前に知ることが学びを助けるということに気が付いたのだと思われる。

小テストなどの活用という意見もあった。授業の途中途中で理解度を確認していくことは、学生自身が自分の理解度を確認したり、わからないところを明確にする意味で重要である。小テストの内容がその単元の重要なポイントであることを学生に知らせる役割も果たしている。

表８　対面授業でもしてほしいこと

自主学習への活用
- 授業を見返せるように動画撮影 OK
- 自主的に取り組む課題を授業内に入れる

授業方法
- 授業後に授業はどうだったかのアンケート。
- 授業開始時に今回の学習範囲の提示
- manaba の小テスト機能の活用、授業映像の配信

授業資料
- 資料を元に授業を進めていたこと
- 対面の時も授業でやった内容の資料をマナバに載せる
- 対面においてもマナバに動画をあげる
- YouTube などの参考動画・資料の活用

課題の提示や提出
- 早めの課題提示
- 課題をマナバでいつでも出せること
- レポートなどの長文を書く課題はパソコンで提出する形にする

授業後の振り返りアンケートについても記述があった。授業中に手を挙げての質問は、学生にとってハードルが高い。授業終わりに授業を振り返る時間を与え質問を書かせ、理解を確認する。このことで流れていく学習内容が定着する。さらにここでの質問を使い、次の授業で前回の授業を振り返りながらの授業展開ができる。双方向的の授業となり授業の連続性が担保される。これらは主体的な学習アクティブラーニングのための必須アイテムと考える。

課題の提示や提出を manaba からできるようにするという要望もあった。LMS 利用の最大の強みであるが、これも対面授業ではまだまだ行われていないということであろう。

６．まとめ

６．１　遠隔授業の課題

短期間の準備ではあったが、前期の授業は、遠隔授業をおりまぜ正規の 15 回の授業を実施し単位認定をすることができた。教員コメントにあったように準備がとても大変であったが、子ども学科 2 年授業以外は短期間であったことも幸いした。教員の授業の満足であった割合は 4 割強、否定は 2 割程度と比較的満足度は高かった。学生は、5.5 割が満足であり否定派 1 割強で、学生が満足度が高かった。コロナ禍の中、今回の遠隔授業は、課題はあるものの上手くいったと考える。

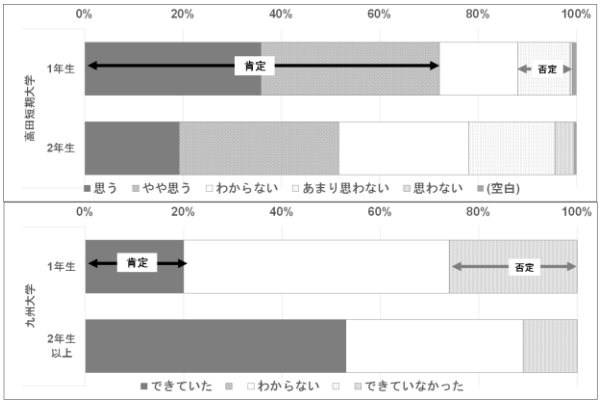

図 14　対面授業に代替できるか(他大学との比較)

特徴として、1 年の方が満足度や代替度が高く、教員や学生間のコミュニケーションの満足度も 1 年の方が高い結果であった。これは、他大学の調査[1,2]とは反対の傾向であった。これは、遠隔が終わり対面授業に移るもコロナ禍が再び強くなりつつある時期であったという調査のタイミングのためかもしれない。代替できるかの回答を比較すると（図 14)、1 年の肯定回答はほぼ同じ 7 割程度で、2 年の割合が本学が 5 割に対し他大学が 9 割弱と異なっている。つまり、1 年が高いのが問題なのではなく、2 年が低いのが問題なのである。本学での授業を 1 年間受けた学生たちが他の大学に比べ肯定する学生が少ないのは、本学の対面授業が遠隔授業に比べ良かったと言えるし、遠隔授業が長かった子ども学科の 2 年の代替度が低いことを考えると、遠隔授業が学生にとっては良くなかったとも言える。

６．２　遠隔授業から対面授業の改善へ

遠隔授業という環境下で、授業運営を進めるために教員は授業づくりをあらためて意識したと思う。普段あまり深くは意識してこなかった授業構成を考えたり、学生の声をどう拾うか、学生にどう指示したり質問に答えるか、どうやって資料をわかりやすくするかなどを考えて遠隔授業を進めた。うまくいったこと、学生の批判となってしまったことなどがアンケート結果に表れた。遠隔授業ではあるが、授業づくりという点では対面と同じである。この調査によって、対面授業でもすべきことがなされていなかったという事実が洗い出されたと考える。授業づくりで必要な事項をあらためて意識し、効果的にそれを実施できる LMS を対面の授業づくりのツールとして利用することでより良い授業が展開できよう。表 9 にそのための事項をまとめた。

表 9　よりよい対面授業をするための事項

（1）授業の進め方
- 授業の最初に、その日の授業の全体像を示す。
- 授業の終わりに学生に授業の振り返りをさせるとともに、質問等を提出させる
- 授業の最初に前回の授業の質問の回答や振り返りをする
- 途中で、理解度を確認するためのアンケート(クリッカー的な使用)や小テストを実施する。

（2）授業資料
- 授業の展開に応じたわかりやすい資料を作成し、LMS に掲載して、期間限定ではなくいつでも学生が閲覧できるようにする
- 授業の動画あるいは授業内容の資料を LMS に掲載し、しつでも視聴できるようにする

（3）LMS の活用
- 小テスト、アンケート機能を活用する
- 学生への連絡や指示は、コースニュース等でこまめに行う
- 提出課題へのコメントや掲示板への返信など、学生への質問に対し細やかに対応する
- 学生同士の学びを意識し、グループワークではプロジェクト機能を活用する。

参考文献

1.新型コロナウィルス感染症対策に関する大学等の対応状況(令和 2 年 4 月 23 日時点)、文部科学省

2.新型コロナウィルス感染症対策に関する大学等の対応状況(令和 2 年 6 月 1 日時点)、文部科学省

3.新型コロナウィルス感染症対策に関する大学等の対応状況(令和 2 年 7 月 1 日時点)、文部科学省

4.大学等における後期授業の実施方針の調査について（地域別状況）（令和 2 年 10 月 2 日)、文部科学省

5.ICT を利用した教育を振り返る、藤巻朗、【第 11 回】4 月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム、2020.6.26

6. 九州大学のオンライン授業に関する学生アンケート（春学期）について、野瀬健、【第 12 回】4 月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム、2020.7.10

7. 大学教育における COVIT-19 への対応集諦についての調査、一般社団法人大学教育学会 2020 年 11 月 25 日版